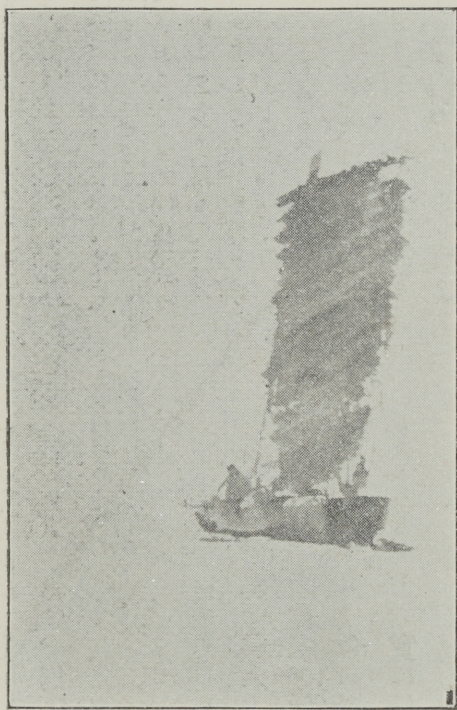


ることが出来ようか、其方法を發見すること、又それを描出する方法を知るは大切なこととす、先づ第一は、已に自在畫遠近法等の初歩を知る者とすれば、如何に自然を觀察するかである、其次は勇氣です、勇氣が無くば其寫生は憶病な平凡なものとなる、何んでも、世界は我物だと云ふ持主の考へて、堂々として自然に向はなければいかぬ、若し君のスケッチが失敗に終つたならば、それは大々的失敗ならしめるがよい、美術に於ては小さい失敗など云ふケチなことは

無い寫生に際しては、念頭唯自然あるのみ、憶せず之れを畫き又た自己の畫法でかく、中には人の畫法を真似るとか人のかいた畫を真似るとかする者もあるが、あれは失敗の基ですから止すのです、自然其物で已に充分である、先年の事でしたが、一人の青年が僕の處へ來て、大に弱つたと云ふから、何んで弱つたかと聞

いたらば、どんな流儀にしたら好いか分らぬ、微風ある朝の景色には「コンステブル」を思出して「コンステブル」風に畫、こうとし、朝霧の景には「コロロ」を考出して「コロロ」風にかこうとするので迷つて困ると云ふのでした、それで僕は其青年を戒めて、決して流儀などを氣にしてはいかぬ、自分は自分の思つた通りを鞏固に自信を以て現はすように稽古したまへ、其内には自分



石川欽一郎 筆

の流儀が出來てくる、つまり「コロロ」やつて居るのが失敗を來たすのであると云ひ聞かせた事であります
(以下次號)
アルフレツド、イースト氏は英國の人にして倫敦に住し風景畫家として現時世界第一流の地歩を占む其作品の模寫は他日石版として紙上に現はすべし (編者)

漱石氏の水彩畫

近刊の新潮紙上、漱石氏の一夕話をよむと、氏も「猫」を書いてゐる頃は水彩畫に筆を染めたもので、近頃は多忙のため描く暇もないさうであるが、氏の云ふ處によると「この間引き越しの手傳いに来てくれた人に自分の畫帖をやつて、それから後に其人の家に行つて見ると、ちやんと額にして茶々しく掛けてあるぢやないか、見ると柳は柳らしく見えるし、家鴨は家鴨に見える、こんな事なら廢めないでもよかるうかと、我ながら感心したよ」とあとから、滿更なお腕前でもないと思える。